

全校の皆さん、おはようございます。

七月も中旬に差し掛かり、一学期も終わりに近づいてきました。一年生はこの春から高校生としての新しい生活が始まりました。たった数ヶ月ですが大きな変化の中で新しい出来事との出会いの連続だったと思います。二年生は真ん中の学年として、クラブではすでに代替わりして中心的な立場にいる人もいるかもしれません。三年生は夏休みを目前にして、いよいよ自分の卒業後の進路について具体的に行動する時期となりました。それぞれに、この一学期の終わりという節目を前に、これからの自分の歩んでいく道の大きな岐路に立っていると言えます。

特に三年生は進路のことを考えなければいけませんので、プレッシャーを感じている人も少なくないと思います。プレッシャーと言っても種類やその要因はさまざまですが、そのひとつには、これまでの自分自身の過ごし方や行いを振り返ることで湧いてくる焦り、というものがあるのではないのでしょうか。

これまで親や先生からの助言、また学校での学習の機会がたくさんあったにも関わらず、あまり自分事として考えることができず真剣に向き合ってこなかった。今、周りと自分を比べてみるとみんな夢や目標に向かって努力しているように見える。このままではいけない、と頭では分かっているにもかかわらず行動に移さない自分に対して焦りやイライラが募る、という状況の人がいるのだろうと思います。こういうことは進路のことに限らず人生の中で誰もが経験することだと思っています。

「因果応報」や「自業自得」という言葉があります。自分のこれまでの出来事や行いがこれからの自分に影響を与えそれを引き受けなければならぬ、ということを表す言葉です。仏教に由来する言葉ではあるのですが、伊那西高校で大切にしている浄土真宗の教えの伝統の中では、あまり使うことのない言葉です。浄土真宗では、少し違った視点で、自分の「これまで」と「これから」のことを考えます。

浄土真宗の僧侶である藤代聡麿先生は「これまでがこれからを決めるのではない。これからがこれまでを決めるのだ。」とおっしゃいました。私たちは過去のよくない行いや出来事を引きずってしまうこともあるし、反対に、過去の栄光にいつまでもしがみつくといいこともあります。どちらも「これまでがこれからを決める」と思い込んでいるからです。「これからがこれまでを決める」というのは、それとはまったく違う視点です。過去の失敗や思い出したいくない苦い出来事も、そういう経験からこそ学ぶことがあります。失敗を失敗のままにするのか、もしくはそこから大切なことを学ぶのか、それが「これからがこれまでを決める」ということです。